

二百十日・野分

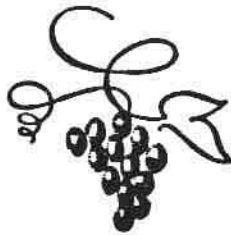
夏目漱石

新潮文庫

にひやくとおかのわき
二百十日・野分

新潮文庫

な - 1 - 16



昭和五十一年七月三十日発行
昭和六十三年六月二十日二十刷

著者 夏目漱石
なつめ そうせき

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四〇
振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

二 百 十 日 ・ 野 分

夏 目 漱 石 著

新 潮 社 版

目次

二百十日……………七

野分……………七

注解・解説
紅野敏郎

二百十日・野分

二百十日

一

ぶらりと両手を垂げたまま、圭さんがどこからか帰って来る。

「何所へ行ったね」

「一寸、町を歩行いて来た」

「何か観るものがあるかい」

「寺が一軒あった」

「それから」

「銀杏の樹が一本、門前にあった」

「それから」

「銀杏の樹から本堂まで、一丁半ばかり、石が敷き詰めてあった。非常に細長い寺だった」

「這入って見たかい」

「やめて来た」

「その外に何もないかね」

「別段何もない。一体、寺と云うものは大概の村にはあるね、君」

「そうさ、人間の死ぬ所には必ずある筈じゃないか」

「成程そうだね」と圭さん、首を捻る。圭さんは時々妙な事に感心する。しばらくして、捻ねっ

た首を真直^{まっすぐ}にして、圭さんがこう云った。

「それから鍛冶屋^{かじや}の前で、馬の杳^{くろ}を替える所を見て来たが実に巧みなものだね」

「どうも寺だけにしては、ちと、時間が長過ぎると思った。馬の杳^{くろ}がそんなに珍しいかい」

「珍らしくなくっても、見たのさ。君、あれに使う道具が幾通りあると思う」

「幾通りあるかな」

「あてて見給え」

「あてなくっても好いから教えるさ」

「何でも七つばかりある」

「そんなにあるかい。何と何だい」

「何と何だって、慥^{たし}かにあるんだよ。第一爪^{つめ}をはがす鑿^{のみ}と、鑿^{のみ}を敲^{たた}く槌^{つち}と、それから爪^{けず}を削^{けず}る小刀^{がたな}と、爪^{けず}を削^{けず}る妙なもの、それから……」

「それから何があるかい」

「それから変なものが、まだ色々あるんだよ。第一馬の大人^{おとな}しいには驚ろいた。あんなに、削られても、剥られても平気でいるぜ」

「爪だもの。人間だって、平気で爪を剪^きるじゃないか」

「人間はそうだが馬だぜ、君」

「馬だって、人間だって爪に変わりはないやね。君は余^よっ程^{ほどのんき}呑気だよ」

「呑気だから見ていたのさ。然^{しか}し薄暗い所で赤い鉄を打つと奇麗だね。ぴちぴち火花が出る」

「出るさ、東京の真中まんなかでも出る」

「東京の真中まんなかでも出る事は出るが、感じが違うよ。こう云う山の中の鍛冶屋は第一、音から違う。そら、此所ここまで聞えるぜ」

初秋はつあきの日脚は、うそ寒く、遠い国の方へ傾いて、淋しい山里の空氣が、心細い夕暮れを促がすなかに、かあなかあんと鉄を打つ音がする。

「聞えるだろう」と圭さんが云う。

「うん」と碌ろくさんは答えたぎり黙然もくねんとしている。隣りの部屋で何だか二人しきりに話をしている。「そこで、その、相手が竹刀しなを落したんだあね。すると、その、ちよいと、小手を取ったんだあね」「ふうん。とうとう小手を取られたのかい」

「とうとう小手を取られたんだあね。ちよいと小手を取ったんだが、そこがそら、竹刀を落したものだから、どうにも、こうにも仕様がないやあね」

「ふうん。竹刀を落したのかい」

「竹刀は、そら、さっき、落してしまったあね」

「竹刀を落してしまつて、小手を取られたら困るだろう」

「困らああね。竹刀も小手も取られたんだから」

二人の話しはどこまで行つても竹刀と小手で持ち切っている。黙然として、対坐していた圭さんと碌さんは顔を見合わして、にやりと笑つた。

かあなかあんと鉄を打つ音が静かな村へ響き渡る。癡走かんった上に何だか心細い。

「まだ馬の杵を打ってる。何だか寒いね、君」と圭さんは白い浴衣の下で堅くなる。碌さんも同じく白地の単衣の襟をかき合せて、だらしない膝頭を行儀よく揃える。やがて圭さんが云う。

「僕の小供の時住んでた町の真中に、一軒豆腐屋があつてね」

「豆腐屋があつて？」

「豆腐屋があつて、その豆腐屋の角から一丁ばかり爪先上がりに上がると寒磐寺と云う御寺があつてね」

「寒磐寺と云う御寺がある？」

「ある。今でもあるだろう。門前から見ると只大竹藪ばかり見えて、本堂も庫裏もない様だ。その御寺で毎朝四時頃になると、誰だか鉦を敲く」

「誰だか鉦を敲くって、坊主が敲くんだろう」

「坊主だか何だか分らない。只竹の中でかんと幽かに敲くのさ。冬の朝なんぞ、霜が強く降って、布団のなかで世の中の寒さを一二寸の厚さに遮ぎって聞いていると、竹藪のなかから、かにかん響いてくる。誰が敲くのだか分らない。僕は寺の前を通る度に、長い石磴と、倒れかかった山門と、山門を埋め尽くす程な大竹藪を見るのだが、一度も山門のなかを覗いた事がない。只竹藪のなかで敲く鉦の音だけを聞いては、夜具の裏で海老の様になるのさ」

「海老の様になるって？」

「うん。海老の様になって、口のうちに、かかん、かかん」と云うのさ」

「妙だね」

「すると、門前の豆腐屋がきつと起きて、雨戸を明ける。ぎっぎつと豆を臼で挽く音がする。ざあざあど豆腐の水を易える音がする」

「君の家は全体どこにある訳だね」

「僕のうちは、つまり、そんな音が聞える所にあるのさ」

「だから、何所にある訳だね」

「すぐ傍さ」

「豆腐屋の向か、隣りかい」

「なに二階さ」

「どこの」

「豆腐屋の二階さ」

「へええ。そいつは……」と碌さん驚ろいた。

「僕は豆腐屋の子だよ」

「へええ。豆腐屋かい」と碌さんは再び驚ろいた。

「それから垣根の朝顔が、茶色に枯れて、引っ張るとがらがら鳴る時分、白い靄が一面に降りて、町の外れの瓦斯燈に灯がちらちらすると思うと又鉦が鳴る。かんかん竹の奥で冴えて鳴る。それから門前の豆腐屋がこの鉦を合図に、腰障子をはめる」

「門前の豆腐屋と云うが、それが君のうちはないか」

「僕のうち、即ち門前の豆腐屋が腰障子をはめる。かんかんと云う声を聞きながら僕は二階へ上

がつて布団を敷いて寝る。——僕のうちの吉原揚は旨かつた。近所で評判だつた」

隣り座敷の小手と竹刀は双方とも大人しくなつて、向うの椽側では、六十余りの肥つた爺さんが、丸い脊を柱にもたして、胡坐のまま、毛抜きで鬚の髯を一本々に抜いている。髯の根をうんと抑えて、ぐいと抜くと、毛抜は下へ弾ね返り、鬚は上へ反り返る。まるで器械の様に見える。「あれは何日掛つたら抜けるだろう」と碌さんが圭さんに質問をかける。

「一生懸命にやったら半日位で済むだろう」

「そうは行くまい」と碌さんが反対する。

「そうかな。じゃ一日かな」

「一日や二日で奇麗に抜けるなら訳はない」

「そうさ、ことによると一週間もかかるかね。見給え、あの丁寧に鬚を撫で廻しながら抜いてるのを」

「あれじゃ。古いのを抜いちまわないうちに、新しいのが生えるかも知れないね」

「とにかく痛い事だろう」と圭さんは話頭を転じた。

「痛いに違いないね。忠告してやろうか」

「なんて」

「よせつてさ」

「余計な事だ。それより幾日掛つたら、みんな抜けるか聞いて見ようじゃないか」

「うん、よかろう。君が聞くんだよ」

「僕はいやだ、君が聞くのさ」

「聞いてもいいがつまらないじゃないか」

「だから、まあ、よそうよ」と圭さんは自己の申し出しを惜気もなく撤回した。

一度途切れた村鍛冶の音は、今日山里に立つ秋を、幾重いくえの稲妻に砕く積りか、かあんかあんと澄み切った空の底に響き渡る。

「あの音を聞くと、どうしても豆腐屋の昔が思い出される」と圭さんが腕組をしながら云う。

「全体豆腐屋の子がどうして、そんなになったもんだね」

「豆腐屋の子がどんなになつたのさ」

「だって豆腐屋らしくないじゃないか」

「豆腐屋だって、肴屋さかなやだって——なろうと思えば、何にでもなれるさ」

「そうさな、つまり頭だからね」

「頭ばかりじゃない。世の中には頭のいい豆腐屋が何人いるか分らない。それでも生涯豆腐屋さ。気の毒なものだ」

「それじゃ何だい」と碌さんが小供らしく質問する。

「何だって君、やっぱりなろうと思うのさ」

「なろうと思つたって、世の中がしてくれないのが大分あるだろう」

「だから気の毒だと云うのさ。不公平な世の中に生れれば仕方がないから、世の中がしてくれなくても何でも、自分でなろうと思うのさ」

「思つて、なれなければ？」

「なれなくつても何でも思うんだ。思つてるうちに、世の中が、してくれる様になるんだ」と圭さんは横着を云う。

「そう注文通りに行けば結構だ。ハハハハ」

「だって僕は今日までそうして来たんだもの」

「だから君は豆腐屋らしくないと云うのだよ」

「これから先、又豆腐屋らしくなつてしまふかも知れないかな。厄介だな。ハハハハ」

「なつたら、どうする積りだい」

「なれば世の中がわるいのさ。不公平な世の中を公平にしてやろうと云うのに、世の中が云う事をきかなければ、向むこうの方が悪いのだろう」

「然し世の中も何だね、君、豆腐屋がえらくなる様なら、自然えらい者が豆腐屋になる訳だね」

「えらい者た、どんな者だい」

「えらい者つて云うのは、何さ。例えば華族とか金持とか云うものさ」と碌ささんはすぐ様えらい者を説明してしまふ。

「うん華族や金持か、ありや今でも豆腐屋じゃないか、君」

「その豆腐屋連が馬車へ乗ったり、別荘を建てたりして、自分だけの世の中の様な顔をしているから駄目だよ」

「だから、そんなのは、本当の豆腐屋にしてしまふのさ」